
行灯の昼

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行灯の昼

【Nコード】

N2394Y

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

株式会社エア・トラッド・ジャパン、よつつめのお話です。地味で口下手、見た目も凡庸。万事につけて目立たない男の一人称のお話。フツの人たちがフツの生活の中で、ゆったりと心を通わせる話になると、いいなあ。

*R-15は保険なので、そんなシーンが出てくるかどうか、まだ未定。

「長谷部君、肩揉んでえ」

デスクの上に腕を投げ出す水元佑子、三十四歳経理部総合職。

彼女は二十七歳で一度姓が変わり、二十九歳の時に元の姓に戻った。バツイチ子ナシ、そして俺の同期だ。

俺が社内で唯一、気安く口を利く女でもある。

三十四にもなって、女と喋るのに緊張するのは、俺が慣れていないせいだ。

俺は口下手だ。ツラも女ウケしない。

二年後輩の山口みたいにな、ツラも良ければ弁も立ち、上司の覚えがめでたいヤツと違うのだ。

「なんで、水元の肩を揉まなきゃなんないの？」

「長谷部君の芋虫みたいな指が、気持ちいいの」

芋虫ねえ……確かに、俺の指は太い。

「新しい派遣の子が、なかなか使えなくってえ。坂本さん、よく働いたんだけどなあ」

「ああ、なんだかパニック起こしてたって子」

水元の首から肩にかけて、揉み解してやる。

「いててっ！もつと柔らかく揉んでよう」

「力なんか入れてないぞ。血行悪いな、ババアみてえ」

「花の独身よ、私」

「まったく……祝儀、返せ」

「ああ、その節は有難う存じました。もう使っちゃったよーん」

残業の薄暗くなった社内で、経理部にも水元しか残ってない。

俺の所属する設備施工部も、もう空だ。

「およ。ラブシーンかと思ったら、長谷部さんと水元さんかあ」

開発営業部のお調子者、萩原がパーティーシヨンの隙間から顔を出した。

「あら、長谷部君と愛の語らいの最中よ。邪魔しないで」
水元が軽やかに返すのを、羨ましく聞いていた。

「長谷部さんが愛の語らいつすか。誠意ありそうっすねえ」
ほらね、俺の評価なんて、そんなもんだ。

今は山口の嫁さんになってしまっている野口さん。

彼女は入社当時、立てば芍薬とはいかなくても、タンポポよりはずいぶん美しかった。

俺より一年後に入ってきた彼女に、ずいぶんときめいたこともあった。

彼女の頭の回転の速さとか、華やかな雰囲気、気圧されて、誘うこともできなかつたけど。

あれだけ仕事ができるのに、短大卒だっただけで一般職でサポート業務しかさせない、会社のシステムってなんだかヘンだ。

俺がそう言っただけで何にも変わらないから、誰にも言わないけどね。

いつの間にか「若手の飲み会」に誘われなくなった俺は、先日一度だけ、山口と水元に誘われて、酒の席に顔を出した。

「長谷部さんが来るなんて、珍しい」

そう言っただけで歓迎してくれた後輩たちは、時間が過ぎるにしたがつて、俺の入っていけないノリの話題に移り、お開きになる頃には、気を遣った水元さんが隣に座っているだけだった。

仕方ない。喋るのは苦手だし、今風の話題にもついていけないんだから、後輩たちが悪いわけじゃない。

気を遣わせたくないから、やっぱり「若手の飲み会」は、誘われてもパスしようと思うだけだ。

「長谷部さん。設備施工部、今忙しいですか」

「また小商いの工事とか言わないよね？」

萩原の俺への問いに、隣の席が、即答する。

俺の所属する部署は、基本的にビル物件の空調設備の設計施工を行うので、店舗や住宅は扱わない。

「物件のエリアがダブってて、エリア外の工事店にやらせると、後でメンテ契約の時、揉める惧れが……」

その物件に関しては、開発営業部の津田から、先手回しのメールをもらっていた。

「そこを揉めないようにするのが、営業の手腕だろ」

「それが難しい工事店だから、頭下げに来たんですよ」

「山口に相談しろよ。得意だったろ、煙に巻くの」

「他部署だし、現場から離れちゃってるし」

俺より何年か先に入社した生田さんは、とにかく仕事を増やしたくないタイプの人だ。

工事店に仕事をまわすより、元請けが直接工事した方が利益率が高いのは知っている癖に、少し手が空いていても、利益が大きい仕事だけをメインに、小商いをしたからない。

「いいよ、個人商店だろ？予算出てるのか」

気の毒な萩原を解放してやりたくて、生田さんの言葉を遮った。

多分部内で調整しても、うまい業者が探せなくて、こっちに来たのだ。

物件は今、混んでいない。予定外の工事が一日くらい入っても、俺的にはまったく問題ないタイミングだった。

「長谷部、安請け合いですんなよ。まず申請書あげてもらわないと」

「口頭で答えてから申請書なんて、よくある流れじゃないですか。萩原、とりあえず図面送って」

嬉しそうに自分のデスクに向かう萩原の後姿に、生田さんは舌打ちした。

「他部署にどうにかしてもらおうってのが、気に食わねえんだよ。

長谷部は甘いな」

「こっちにも利益は落ちるじゃないですか。それに萩原、最近仕事にノリはじめたとこだし」

「本人の好不調で、請けたり請けなかったりすんのか、お前は」

イヤガラセのようにマウスをポンポン叩いてみせる生田さんに、とりあえず頭を下げておく。

萩原は今年に入ってから、仕事への姿勢が変わってきてるし、そういうヤツはこっちも応援したいんだけど。

「長谷部さん。萩原の無理を聞いてくれたみたいで、ありがとうございます」

一人前の中堅営業社員になった津田が、パーティションの上から顔を出した。

今でこそ萩原の指導担当だけれど、こいつもいろいろやらかしたクチだから、必ず後輩のフォローに入る。

仕事ってのは失敗してナンボだから、実はやらかしたヤツほど成長が大きい。

「津田あ。こっちの仕事増やすように指示したのは、おまえか」

生田さんが、文句言う気満々で噛み付く。

「大丈夫ですよ。俺が行きますから、生田さんには手間取らせません」

俺のとりなしがますます気に食わなかったのか、生田さんは自分のデスクの前に、どん、と座る。

「長谷部みたいなお人好しに、直接話を持ってったら、忙しくて

も請けるのわかってんだろうが。ちゃんと後輩の指導しろよ」

「いや、俺も仕事が詰まったら断りますって。大丈夫だ。行つていいよ、津田」

手を合わせる津田に合図して、場を下がらせる。

荒れ模様の生田さんの説教を聞くのは、俺だけで充分だ。

「は・せ・べ・く・ん」

給湯室でカップ麺に湯を入れてみると、後ろから水元の声がした。

「今日も残業？頑張るねえ」

「いや、これ食ったら帰るけど。家に帰っても誰も居ないし、腹減ったしな」

「生田さんに、またごちゃごちゃ言われてたね」

「仕方ないね。考え方も違うし、俺はやっぱ甘いから」
水元はくすつと笑った。

「だからみんな、長谷部君を頼りにするんだよね。人が好いのは長所だよ。じゃあ、お疲れ様ー」

給湯室から洗面所に向かった水元は、化粧でも直して帰るんだろうか。

頼りにされてると甘く見られてるのは、違うぞ。

本当は生田さんに言い返したいことは、山ほどあったんだ。

「長谷部さんって、糸川さんと飲みに行ったりしてるんですか？」
經理の派遣社員の下田さんは、なんていうかイマドキちゃんで、仕事よりもプライベート優先の雰囲気を漂わせてる。

小さな可愛い顔と、明るい色に染めた髪と、短いスカートだ。
大体ろくすっぽ口を利いたことのない俺に、何故こんな風に話しかけたかって言うと、サービス部の新人の糸川が俺に懐いてるからだ、と見当がつく程度。

利害関係がわかりやすくて、素直っちゃ素直なんだな。

「たまにはね。糸川も今、忙しいから」

「どんな話するんですか？今度、連れてってくださいよお」

他の男目当てに気がつかなくて、気がいたら自分が除け者になっていたことは、何度もある。

座を取り持つほどの話術は心得てないから、俺以外で盛り上がってる話を耳にしながら、ただ同じテーブルに向かつてるだけで、結構消耗する。

好意を持ちつつある女の子に、そんなことをされると、結構へこむんだな。

だけど悟りきった傍観者になるほど、俺もまだ諦めちゃいないわけさ。

三十四にもなれば、それ相応に家庭なんか持つちゃって、子供の一人二人つてのは、俺が学生の頃抱いてたイメージなんだけど、今の自分を鑑みてみれば、それはあんまりリアルな空想じゃなかったらしい。

そりゃ、彼女がいた時代はあった。

一番最近だと五年くらい前に、やけに「結婚したら」って言葉の出

る女の子がいたな。

俺がそこまで盛り上がる前に、とつと他の男を見つけて結婚しやがったけど。

「あなたは、結論が見えてるんだか見えてないんだか、わかんない」「もつとじっくり考えようよ」って言ったときの、返事だった。

つまり、結婚が見えてれば待てるけど、これから考えるんじゃない話にならんってこと、だったらしい。

山口と野口さんが、一緒に会社を出て行く。

あんまり生活の見えないカップルだけど、これから一緒にメシ作ったり、洗濯したりすんのかな。いいなあ。

ドラマみたいな恋愛や、分不相応なロマンスは、期待したくたつてできない。

ただ俺みたいな地味な男を、気に入ってくれる子がいれば、大切にしたいと思う。

実際のところ、職場以外で女の子と話すことなんてないし、職場の女の子の眼中にも、入ってないけど。

つまり、お見合いシステムみたいなところに金を落とすか、このままジジイになっていくか、なのかも知れない。

両方とも、嬉しくはない。

「あ、長谷部さんも、メシ行きませんか？」

気楽に声をかけられたので、てつきり山口と津田だけかと思ったら、野口さんと水元が一緒だった。

同期の水元を呼び捨てなのに、年下の野口さんにだけ敬称をつけるつてのもおかしいけど、距離感が違う。

多分それが、俺の融通の利かなさの証明のようなものだ。

居酒屋に腰を据え、身体なりに大食らいの津田が（こいつの奥さんは、かなり小柄だ）せっせと料理を口に運ぶ。

山口は津田をからかって遊び、野口さんが時々それに便乗する。

水元は若干大人らしい態度で、でも場から浮き上がらずに話に加わっている。

俺は、浮き上がっていないか？

確かに話しやすい面子で、野口さんにも昔ほど緊張はしない。

「長谷部君、梅割り？」

あまり酒の飲めない水元が、世話を焼いてくれる。

ノリ良く話せないことに、卑屈になる必要はないと、わかってはいる。

俺はこのペースでしか他人と付き合えないし、生まれ持ったの外観を挿げ替えることはできない。

今風じゃないかも知れないけど、他人の迷惑にはならないわけだし、社会生活にも不自由はない。

ただ時々ふっと、山口みたいに喋ればいいな、とか、萩原みたいに女の子と気軽に口が利ければ、とか思う。

他人を羨むのに、努力とか理屈はない。

「下田さんに飲みに誘われなかった？」

水元に話を振られ、ぼうつとした頭を会話に切り替える。

「糸川と一緒に話？」

水元は曖昧な顔をした。

「長谷部さんにふられたあって言ってたよ」

直接声をかけたのは俺でも、目当てはどう考えたって違うだろ。

「最近サービスは最近忙しいみたいだからね」

「ああ、あの子、結婚相手探すのに派遣やってる、みたいなところがあるからね」

山口が言葉を挟み、野口さんが同意する。

「仕事はちゃんとしてるんなら、問題ないんじゃない？」

津田がそう言うのと、水元は箸でテーブルをとんと叩いた。

「ミスだらけなのよお」

「まだ入ってきて、二ヶ月だろ。慣れないんじゃないか？」

俺が返事をする、山口は俺の肩をぽん、と叩いた。

「長谷部さんって、やっぱり優しいよなあ。先週、大変だったんじゃない？」

新規の客先の資産状況を調べて、取引の前提として信用限度額を設定するのは、多分どこの会社でも経理の仕事だと思う。

まあ2桁万円ならば、資産状況の質問状に記入してもらってお終いだし、逆に大物件を扱っているような会社は、公開している。

問題は、3桁前半の取引の見込みの場合だ。

大抵の場合は興信所に情報があるのでOKなのだが、直接の契約が子会社だったりすると、わけのわからないことになる。

そして今回の場合は、ちよつと小うるさい客だった。

発行してもらった発注書に書かれた会社名は、興信所にデータがなかった。

そこで税理士が発行した決算報告書の一部をコピーしてもらうことになるのだが、その連絡をしたのが、下田さんだ。

生田さんの物件だから、本来なら生田さんが客先に連絡するべきところだったが、面倒がって経理に丸投げしたのだ。

―会社の決まりなので、御社の決算報告書をFAXしてください。

―そんなものを何に使うの？

―御社の資産状況によって、信用限度額を決めるんです。

―契約するんだから、ちゃんと払うに決まってるでしょう。

―でも、資産を確認しないと、売れない決まりになってるんです。

―相手の財布見て、商売するの？

―だって、赤字になってる会社は払えませんかよね。

どうも、こんなやりとりだったらしい。

資産状況を見せたくない会社つてのもどうかと思うけど、我儘な客は珍しくない。

これからビルを建てようつてんで、すっかり殿様気分の客だって多

いのだ。

それ相手に「金が払える力があるかどうかの確認だ」と言ってしまうのは、あからさまにまずい。

まして「赤字になってる会社は」なんて、言語道断な話だ。

客先はもう、発注を取り消すなんて騒いでるし、こっちはこっちで、メインの担当の生田さんが経理に怒鳴り込むしで、大騒ぎになった。

「慣れない女の子だから」

ちょうど萩原の現場に出ていた俺は、ことの顛末がわからなくて、無難な言葉で生田さんの怒りを鎮めようとした。

「そうだ。お前が余計な仕事を入れたから、こっちの時間がなくなっただ」

生田さんに「詫びてこい」と押し付けられた俺と、経理の課長が雁首揃えて客先に菓子折り付で失言を詫びに行き、社長宅に無料でルームエアコンを1台進呈して、やっと話が収まったのだ。

経理の課長が会社に帰ったとき、下田さんは明るく「お疲れさまー」と言っただけ。

言葉遣いに注意してくれと諭したら、「ああいう時の対応の仕方を、教えてもらっていません」と、悪びれもしなかったと、水元が愚痴交じりに言っていた。

「専門職の派遣だから、プロの事務屋として相手に気を配るっていうのは、当然できると思ってたのよねえ」

当然のように俺に肩を揉ませながら、水元は溜息をつく。

溜息をつくのは、完全とばっちりの俺の方だとは思っただけ。

「ま、無事に物件契約まで済んだし、良かったよ」

「長谷部君は、大きいわよねえ」

いや、腹が立つことは立ってるんだけどさ。

いろいろ複合して腹を立てたから、どこから文句を言っているのか、わからないだけだ。

それが先週の顛末で、その翌日、経理の課長にこっぴどく叱られた
下田さんは、沈んだ顔で謝りに来た。

「もう済んじやったことだから、次から気をつけてね」
そう言って、終わりにした記憶がある。

「なんかねー、大人のホーヨーリヨクとか言ってたよー」

水元が俺の顔を見て言う。

「誰が、誰を？」

「やーだ。下田さんが長谷部君を、よ。生田さんにぎゃあぎゃあ怒られて、派遣元にまで苦情が行って、自分はまずいことをしたらしいって自覚したとこで、なんか優しい事言っただんじやないの？」

「いや、特に言っていないと思うけど」

あれが優しいと思えるんなら、ひどい誤解だ。

俺は話を長引かせたくなかっただけだし、彼女自体が派遣解除になっても、実はなんとも思わないと思う。

「長谷部さんは確かに、安心感ありますよね」

ストレートな津田は、お世辞は言えないから、外からはそう見えているのかも知れない。

「ああ、そうそう。困った時の長谷部さん頼み、とか、あるもんなあ」

山口まで合わせる。

同じ会社に困ったヤツが居れば、助けてやりたいと思うのは、俺が甘いんだろうか。

「長谷部君、愛されてるねえ」

水元が笑う。

「おっさんになりかけた男に愛されても、大して嬉しくない」

「あたし、不思議なのよねえ」

野口さんが唐突に俺に向かって言った。

「長谷部さんって、優しいし真面目だし、結婚するには良いタイプなのに、なんで独身なの？女の子の好み、うるさいの？」

顔面と頭の良い男と結婚した人に、そんなこと言われたって困る。そう言ってくれるなら、野口さんが俺に惚れてくれたら文句はなかったのに。

「派手にアピールする部分が少ないから、気付かれ難いんじゃない？」

水元はウーロン茶なので、結構冷静だ。

俺が何故結婚してないのかの分析なんて、要らないんだってば。

考えてみれば、山口も津田も社内恋愛で、こいつらこそ社外でいくらでも恋愛できそうなのに、近いところで探したもんだ。

水元の離婚した相手は、確か取引先の男だった。

梅割の梅を焼酎の中で潰してみる。

明日の休みは、多分テレビ見て、終わりだ。

「生田あ。流通管理が、与信オーバーで売上計上できないって言うてるぞお」

「いや、一昨日の現金入金で、出荷できる筈だけど。入金してくれてないのかなあ」

「経理が入金処理忘れてんじゃないかあ？水元さんに聞いてみるよ」
こんなやりとりの後に、名前を呼ばれるのは俺だ。

水元に内線で確認を頼んだ後、自分の仕事のためにモニタと睨めっこしていた。

しばらくしたら、パーテーションの影から、水元がひょっこり顔を出した。

「さっき連絡貰った物件、誰の？」

生田さんの物件だと教えると、ちよつと眉間に皺を寄せてから、覚悟を決めたように中に入って来る。

そして、入金処理ミスを報告し始めた。

「何やってんだよ！今日の出荷があるから、現金入金で頼んだのに！経理がいい加減な仕事して、現場に皺寄せが来るんじゃ、会社はガタガタじゃねえか！」

ここぞとばかりに言い募る生田さんに、口答えせずに頭を下げる水元は、痛々しい。

大体ベテランの水元が、そんな初歩的なミスをするわけがない……と、思ったのは、俺だけって訳でもない。

「まあまあ、水元さんにそんなに怒ったって仕方ないだろ。本人が処理したわけじゃないだろうし」

課長が割って入らなければ、生田さんの文句は延々続いたろう。

「でしょ？派遣さんが処理したんじゃないの？」

「でも、私が責任者ですから。任せないで、最終チェックすれば良かったんです」

最敬礼する水元に、生田さんがまだ嘔み付いた。

「処理した当人に連れて来いよ！派遣だからって無責任なことすんなって言ってやるから！」

「そこまでにしとけよ。水元さんが頭下げてる意味、なくなるだろ」

何度もぺこぺこ頭を下げて、水元は自分のブースに戻っていった。

間接部門は地味なのに、「間違いがなくて当然」と思われやすい。

実際、経理が間違いだらけじゃ、会社は立ち行かないけど。

俺も現場じゃあ責任者だし（っていつても、設備施工部は平均年齢が高い）、他部署の若手を指導する立場にはいるけど、派遣社員を上手に使えるかっていうと、ちょっと自信はない。

まだぶつくさ言いながら、流通がOKになった生田さんは安全帯をがちゃがちゃ言わせて出掛けて行った。

「長谷部さん。生田さん、すっごく怖かったですね」

給湯室でマグにコーヒーを入れたとき、後ろから下田さんに話しかけられた。

「あれ、私が入金先のマスタを間違えて入力したんです。水元さんに悪いことしちゃって」

ああやっぱり、と思ったのは、今まであんなミスはなかったからだ。

「長谷部さんの物件なら、自分で謝りに行こうと思ったんですけど、生田さんじゃ怖いんだもん」

水元なら怖いと思わないとでも、言っただろうか。

無言で給湯室を出ようとしたら、もう一度声を掛けられた。

「今週の飲み会、長谷部さんも参加するんですよね？」

「わかんないなあ。多分、出ないと思うけど」

「何ですかあ？忙しくても来てくださいよ。私、長谷部さんとお話したい」

調子良いこと言われたって、ずいぶん懲りてるんだってば。それが自分の交友層を薄くしてるのは、わかってるけど。

金曜日の晩、帰ろうとしたところで、サービス部の糸川から声をかけられた。

「長谷部さんも行くんですね？一緒に行きましょうよ」

「飲み会？俺、参加って言ってないけど」

そこに女の子たちが通り掛った。

仕事が終わって遊びに出ようとする女の子たちは、やけに華やかだ。

「糸川君も長谷部さんも参加ですよえ。先に行ってまーす」

「俺、参加になってる？」

驚いて聞き返すと、下田さんがにこにこしていた。

「わかんないって言ってたから、私が保留にしました。お仕事終わったんなら、参加できますよね？」

わかんないってのは、婉曲な不参加表示のつもりだったんだけど。

「ちゃんと来てくださいね。私、長谷部さんと飲んだことないんですから」

そう言っただけで、女の子の集団の中に戻ってしまったのを、呆然と見送る。

参加になっちゃってるんなら、行かないのは幹事に申し訳ない。

糸川が待っていてくれるので、作業着から着替えることにする。

とは言っても、俺も糸川も営業みたいにスーツを着ているわけじゃなくて、オックスフォードシャツにスラックスだけど。

更衣室から出たら、今度は水元がその前を通るところだった。

「あれ？長谷部君も参加なんて、珍しいね。一緒に行くから、ちょっと待ってて」

そう言っただけで女子更衣室の中に消えて、すぐに出てきた。

「今日のオーバーサートイは、私だけかと思ってたら、ちょっと心

強くなった」

「え？あとみんな二十代？」

「そうよあ。山口夫妻ははじめから不参加だし、津田君は打ち合わせ入っちゃったし、他の所帯持ちは最初から声掛けられてないしね」

三人で並んで歩いて居酒屋に向かう。

「良かったわ。私だけが長老じゃ、ちょっと居づらいもん。一次会で引き上げるつもりだけど」

水元の言葉で、俺も二次会までは付き合わなくて良いだろ、と思ったら、少し気分が楽になった。

「ところで、今日の会費いくら？」

「参加って言ったのに知らないの？」

水元が驚いて俺の顔を見上げた。

「それどころか、どこでやるかも知らない。俺、参加なんて言っ
ねーもん」

「俺、さっき下田さんから、長谷部さんが参加って聞いたんですけど」

糸川がそう言うと、水元は少し複雑な顔をした。

「下田さんが長谷部君を、参加させたかったってことかしらね」

居酒屋の中は、既にざわめいていた。

糸川はあっさりと中央の席に呼ばれ、俺と水元がはじっこに座ろうとした時、奥から声がかかった。

「長谷部さん、こっち空いてます。たまには真ん中に来てくださいよう」

見ると一際若くて華やかな一角で、それだけで俺の居場所は皆無だ。「いや、ここで」

そう言いながら、詰めてもらって水元の横に腰を下ろす。

隣の席と形だけの乾杯をして、小皿と箸を回してもらって、近くの会話を聞く。

社内の人間だけで飲んでいるのだから、話題は社内の噂話とプライベートの話半々だ。

水元はちゃんと話についてってるし、時々後輩の大間違いを訂正したりしてる。

最近では、萩原がちょっと前まで経理に居た子とつき合ってるってのが旬の話題で、少しスキャンダラスな扱いだけど、当の萩原が口を噤んでいるので、それに尾鰭がついてたりする。

「いいんじゃない？最近、萩原は前よりも落ち着いてるし、他人のこと考えるようになったよ」

「同情につけ込まれちゃったんじゃないの？」

恋愛なんて当人にしか理解できないんだから、放っておいてやればいいのに。

水元が手洗いに立ったとき、その席に下田さんがすとんと座った。

「長谷部さん、なんでこんなにはじっこに座ってるんですか？私、長谷部さんとお話したかったのに」

上目遣いでそんなこと言われても、何を喋っていいかわからない。大体、なんで俺にそんなに近寄ってくる？

あんたの目当ては俺じゃないだろうよ。

「長谷部さんって、お休みの日とか、何してるんですか？」

「寝坊して、洗濯して、テレビ見てるかな。たまに、映画見に行ったりはするけどね」

「映画って、どんなの見るんですか？私、最近映画なんて見てないですー」

聞かれたことに返事をしているだけで、会話になんてなっていない。

「長谷部さんって、生田さんと一緒の部署で、大変ですよねえ」

「いや、あの人は仕事が好きっちりしてるし、現場で頼りになる人だよ」

下田さんは顔を顰めた。

「長谷部さんって本当に優しいんですね。私、あんな風に文句ばかり言う人、きらい」

優しいんじゃないくて、本当に生田さんは知識が豊富で、仕事は几帳面なんだって。

「長谷部さんの彼女って、幸せでしょうねえ」

「いないよ」

「えー？じゃ、私、立候補していい？」

はい？何に立候補だって？ずいぶん調子良いことを言うもんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2394y/>

行灯の昼

2011年11月24日22時50分発行